
死神の気まぐれ

時雨彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の気まぐれ

【Nコード】

N4780F

【作者名】

時雨彼方

【あらすじ】

死神が突然夢の中に現れ死の宣告をする。それを信じるも信じないもあなたの勝手。でも、その死神は気まぐれにつき注意……。一話完結型の物にしておこうと思ってます。死神についてはつながりがあるかもしれませんが……。

加納響の場合

目の前に小学1年生くらいの身長で顔は美少女、穏やかな笑顔を向ける少女が立っている。しかし、そんな風貌とは裏腹に全長にして3mはあるつかという大鎌を持ち白いローブを着ている。なぜ、そんな格好をしているのだろうと思っていると少女が笑顔で一言。

「あなたの生を頂きます。あと1日。そうしたら迎えに来ますよ。」

そう言って忽然と姿を消した。

（変な夢を見た……）

男はベットから降り立ち上がるとカーテンを開け朝の陽光に目を細めた。

男の名前は加納響^{かのう ひびき}。現在高校に通う17歳。家族構成は父母妹の4人家族。性格は至って普通で、変わっているところがあるとすれば時々幽霊のようなものが見えるくらいだ

（いつもの感じと違うけど、まあいいか。）

特に気にする風でもなく響は誰も居ない1階へと降り朝食を作る準備をした。響の家ではその日一日の家事全般は当番制になっておりこの日は響の担当だった。

一通りの食事の準備を終えると母父妹の順に起きて朝の挨拶を交わすとそれぞれ席に着いた。その日の朝食はトーストにサラダ、スクランブルエッグとコーヒ―と実にシンプルなものだ。誰も食事には文句を言うことなく朝の談笑を楽しみながら食事を終えそれぞれの準備へと向かうためにリビングを出て行った。

響は朝食の片づけをしてから学校の準備をしようと思いテーブルに有る皿などを台所へ運び始めた。

一通り運び終わったところで食器を洗おうとしてその手が止まる。目の前に夢に出てきたあの少女が居たからだ。響は少女を見つめたまま何も言えずに固まっている。

そんな響を見て面白かったのか少女はクスクスと笑うと話し始めた。

「加納響さん、おはようございます。昨晚あなたの夢に勝手に出させていただきました。いきなりで困惑されるかもしれませんが今日は今日限りで死にます。私はそれを届けるための死神とでも思ってください。」

そついうと少女はまたクスクスと笑い始めた。

響は何を言われてるのかまったく分らず硬直したままだった。

（死神？俺が今日死ぬ？ いったいどういうことなんだ……）

固まったままそんなことを考えていると少女はまた話し始める。

「はい、私は死神です。こんな格好で驚きましたか？ なにも禍々し

いだけが死神じゃないんですよ。」

クスクスと笑いながら話を続ける。

「それとあなたは今日死ぬ。これは紛れも無い事実です。なぜなら私が殺そうと思ったから。残念ですが今のところその考えを変えるつもりは微塵もありません。残念ですがあきらめてください。」

あ、でもと間延びした声を出した少女は、

「私が心変わりするくらいの事が起きれば、考えちゃいます。」

そういうと少女は夢の中のときのように忽然と姿を消した。

響は何がなんだかわからず呆けていたが、母に話しかけられ我に戻ると「なんでもない」と言いながら片づけを済まし家を出た。

少し家が出るのが遅れてしまい道を走る響だがやはり昨晚と今朝の事が頭から離れない。

ホームルーム

そうこうしている内に学校に着きHRが始まるギリギリで席に付いた。

「よう。ひびつちゃん、おそかったじゃねーの？」

響が席に着くなり前に座っていた男の子が話しかける。

「ああ、ちよつといろいろあつてな。それよりもかつくんがHR前に席に着いてる方が驚きだ。」

「俺だって、たまにははえーんだよ。」

かつくん、と呼ばれた男の子は口を尖らせながら、失敬なという態度を表した。

ききょう かなめ
桔梗要。響とは小学生からの付き合いで親友とも呼べる存在。昔から響の体質を知っていてそのことについての相談に乗ることが多い。

「席に着け。HRをはじめろー」

そういう担任の声にあわせて自席に着く生徒達。要は響きに「何かあったなら昼にでも話せ」と一言言つと前を向いた。

午前の授業が終わり昼になると要は弁当を響きの机の上に置いた。響きも自分が持ってきた弁当を机に置き二人同時に開け、食べ始めた。

「ところでよ。ひびっちゃんがHRギリなんて珍しいんだけど、例の関係でなんかあったん？」

「いや、ん……」

響は要に話そうか正直迷っていた。

話せば巻き込んでしまうかもしれない、それに死神なんて信じるだろうか。いつもの幽霊話なら信じてもらえるだろうがさすがに死神はきついか、そんな事を思っていた。

「何も話さないならいいーけどさ、困ったことがあったら相談しろよ?」

「ああ、頼りにしてる。」

そういうと二人はいつもの昼食の風景に戻っていった。

午後の授業が始まりしばらくして、響が、ふと校庭をみると外ではサッカーだろうが体育の授業をしている。いつもはあまり余所見をしない響だが今日はなぜかその光景に目を向けて離さない。

しばらく、ぼーっと外を眺めていると急に周りから色が失われそれまで元気に走り回っていた生徒、教室内も自分ひとりだけになっ
てしまった。

（な、なんだ！）

いきなりの事態に響は混乱したが聞き知った声が後ろから聞こえてきたため振り返った。

「加納響。そろそろ死ぬ準備はできましたか？」

少女はそういうと徐に持っている鎌を持ち上げた。響はそれを見て必死で叫んだ。

「あんたが心変わりするほどのことってなんなんだよ！」

少女はキョトンとして、何を言われたのか考えてるようだった。

少しして少女は何を言われたのか分ったらしくウンウンと頷いて鎌を下ろし口を開いた。

「ああ、今朝言ったことですね。私が心変わりするほどの事ですか。」

少女は何も考えていなかったのかうーんと考え閃いたというよう

にポンと手を叩いた。

「ここから、今すぐに飛び降りてくれたら殺しません。」

笑顔でそんなことを言う少女に啞然としながら響は考えていた。

（俺を殺すために2階から飛び降りろって言ってるのかそれとも飛び降りても死なない処置をしてくれるのか。）

正直学校の2階から飛び降りたところで足から落ちれば骨折程度で済むだろう。しかし、そのあと頭など打ち所が悪くて死んでしまうかもしれない。そんなことを考えている響に少女は一言言った。

「平気ですよ。飛び降りても死なないです。その後の生活はどうなるうとしたこつちありませんが。」

また、クスクスと笑うと返答を待っているのか少しの間何もしゃべりかけてこない。

（背に腹は変えられないか……）

そう考えると響は「わかった。」と言って飛び降りる旨を伝える。そうすると少女は笑顔で消え周りには色と音が戻った。

（やるしかないよな……）

暫くして、覚悟を決めた響はベランダに出た。そのとき授業担当から「どこへ行くんだ！」と言われたが無視をした。ベランダに出た響は手すりに手を置き、よっと気合を入れると手すりに座るような形を取った。その行動を見ていた教師や教室内からは悲鳴に近い

ものが上がっていたがお構い無しだった。

「ひびっちゃん！ 落ちたら死ぬぞ！」

「かつくん、死なねえーよ。でも、一応救急車は呼んでおいてね。」

そういうと、響は他の人の制止を振り切り飛び降りた。

下の階で授業をしていた生徒は突然降りてきた人間に悲鳴をあげた。何事かと外を見た教師は啞然とした。そこには足があらぬ方へまがっていて頭から血を出し、誰が見ても絶命してる生徒が横たわっていた。

「人間って不思議、助かると思えばなんでもやっちゃうんだ。それに飛び降りてる最中は生きてるんだから間違った事言ってるやないよね？」

誰にも見えない少女は誰に話しかけることも無くクスクスと笑いながら姿を消した。

次に送る人の所へ行くために……

加納響の場合（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
少しずつ更新しますのでよろしく願います。

鈴木崇の場合

目の前に小学1年生くらいの身長で顔は美少女、穏やかな笑顔を向ける少女が立っている。しかし、そんな風貌とは裏腹に全長にして3mはあるかという大鎌を持ち白いローブを着ている。なぜ、そんな格好をしているのだろうと思っていると少女が笑顔で一言。

「あなたの生を頂きます。あと1日。そうしたら迎えに来ますよ。」

そう言って忽然と姿を消した。

男はガバツと勢いよく飛び起きた。全身は汗でぐっしょりと濡れていてハアハアと肩で息をしている。

男の名前は鈴木^{すずき}崇^{たかし}。髪は伸び放題でやつれた顔は生気が感じられなく仕事もしていない。家に引きこもり外に出ようとはしない、所謂、引きこもりというやつだ。家族は両親との三人家族。

「ゆ、ゆめか……」

男は周りをきよるきよる見回しながら呟く。

カーテンの間からは朝の陽の光が差し込んでいるが男には関係ないかのようにまた布団を頭まで被った。

それから1時間ほどして部屋の前に人がやってきた。

「崇、ご飯。置いておくからね。あと、ちゃんとお風呂には入りなさい。」

それは、崇の母親だった。しかし、崇は返事もせずにその気配が消えるのを待つ。

そして、階段を下りる音が聞こえたところで崇は布団からもぞもぞと起き出し扉を開けそこにあった食事を部屋の中へ入れる。すぐにその食事を平らげると元の位置に戻し扉を閉めた。

「ババア、金だけ残して早く死んでくれないかな。」

そんな不吉なことをぶつぶつ言いながら崇は、パソコンを立ち上げた。崇にとってパソコンでのネットサーフィン以外に娯楽は無かった。

崇は5年前まではきちんとした社会人だった。営業実績も人並みにあり別段不自由も無く、どちらかというと現在の自分のような存在を下に見るような事をしていた。しかし、ある日いきなりクビを通達されなんのやる気も起きず、今に至る。

そんな、昔を思い出して度々苛立ち周囲の物を壁に投げる癖があった。今日も昔のことを思い出し壁に物を投げつけていた。

（くそ！　なんで俺がなんで俺が！）

数分それを繰り返しているとさすがに疲れたのかその行為をやめた。

そして少ししてネットサーフィンを再開しようとパソコンの画面に向かったところ画面がつかない。それどころか周囲が全体的にいつもより暗く感じた。そして周りを見回すと部屋の片隅に見覚えのある一人の少女が立っていた。

（あ、あいつは夢に出てきた……！）

その少女は崇に一步步近づくとしゃべりだした。

「こんにちは、鈴木崇。昨晚は夢に突然お邪魔してすみませんでした。いきなりですが、夢で宣言した通りに今から生を頂きたいと思っていますがよろしいですか？」

そついうと少女は鎌を振り上げたままゆっくりと近づいてくる。

「ちょ、ちょっとまってくれ！　意味が分らない！　だから、意味だけでも教えてくれ！」

半狂乱状態になりながら腕を振り回して崇は精一杯叫んだ。すると少女は鎌を降ろし説明を始めた。

「ああそうですね、いきなり生を奪われるなんて嫌ですもんね。簡潔明瞭に説明しますと私は死神であなは今日たった今死ぬんです。これでいいですか？」

少女は簡単に要点だけを説明すると再び鎌を振り上げた。

「助かる方法は無いのか！？ まだ、まだ死にたくないんだ！」

崇は床に頭を付け必死になって少女へそう問いかけた。少女はうんと困った顔をしてゆっくりと喋りだした。

「仕方ないですね、一つだけ提案です。もし、今日中に家族を全員殺害できれば私は生を奪いません。」

少女はそういうと、答えを待つかのように口を閉じ男を見つめた。

「だが、そんなことをしたら俺は捕まっちゃう。それじゃ、それじゃだめじゃないか！」

それを聞いた少女はほとほと呆れたといった感じで話し出した。

「そんなことを恐れて生を手放すのですか？ まあ、いいですよ。ではさようなら」

そういうと振り上げたままだった鎌を首へ降ろす動作をした。

「分った！ 全員殺す！ それであんたに殺されないのなら……」

それを聞いた少女は満足そうに笑うと夢のときの様に忽然と姿を消した。

それを見た崇はすぐに行動へ移すために部屋を出た。

崇は階段を降りてリビングに入るとソファーに横になって寝息を

立っている母親を見つけた。熟睡しているのを確認すると起こさないようにゆっくりとキッチンへと移動した。

キッチンに入った崇は包丁を手にとった。その足でもう一度リビングに戻るとテーブルの上に置いてある花瓶を手に取り寝ている母親の頭を思い切り打ち付けた。ガシャンと言う花瓶が割れる音とともに中に入っていた水と花が母親の頭にかかる。

その一撃で目を覚まさず母親は動かない。崇は只の気絶かその一撃で死んだのか確認するために脈を診たがまだ生きているのを確認した。生きているのを確認すると馬乗りになりめった刺しにした。崇は何かに取り付かれたように何度も何度も返り血を気にせずに刺し続けた。

その夜、仕事から帰ってきた父親はリビングに入り驚愕した。血の海に横たわる妻を発見しその血の匂いで嘔吐した。父親は息子の安全を確認すべく息子の部屋へ入った。そこに息子は居なく別の場所を探そうと後ろを向いた瞬間驚愕した。目の前には血まみれの包丁を振り上げ今まさに自分を刺そうとしている息子が居たからだ。

崇はそんな父親を見下ろしながら一気に包丁を振り下ろした。しかし、それは肩に刺さっただけで重症を与えられてはいない。肩を刺された父親は痛みには耐えながら崇を蹴り飛ばした。

崇がよろめいてその場に倒れこむと父親はその上に馬乗りになり「おまえがあ！」と言いながら何度も顔を殴打した。

自分の指が折れ息子の顔が陥没し死んだのに気がつく、自分のしたこと愚かさに身を震わせた。

「別に殺さなくてもよかった……」

呟くように言い立ち上がると崇の手から包丁を奪い何かをブツブツ言いながらリビングに降りると、倒れている妻の横で包丁を首に当て自殺した。

それの一部始終を見てクスクスと笑いながら一人の少女が見ていた。

「言っただでしょう？ 『私は』 殺さないって……」

誰に言っただのでも無く、少女はクスクス笑いながら消えていった。次の人を送るために……

鈴木崇の場合（後書き）

なんか、ちよつと無理矢理かなあ・・・

何かご意見ご感想ありましたら是非お願いします。

誤字修正と一部文の追加。

入江美穂の場合

目の前に小学1年生くらいの身長で顔は美少女、穏やかな笑顔を向ける少女が立っている。しかし、そんな風貌とは裏腹に全長にして3mはあるつかという大鎌を持ち白いローブを着ている。なぜ、そんな格好をしているのだろうと思っていると少女が笑顔で一言。

「あなたの生を頂きます。あと1日。そうしたら迎えに来ますよ。」
そう言って忽然と姿を消した。

彼女はゆっくりと目を覚ました。ガタンガタンという電車の揺れる感覚でもう一度眠りそうになる。

（へんな夢……。でも、今の私には丁度良いかな。）

彼女の名前は入江美穂^{いりえ みほ}。黒髪のロングヘアに細い縁無し of 眼鏡を掛けている。その顔はどこか暗く精力を感じられない。化粧品の販売店に勤めているごく一般的な女性。

美穂は住んでいる住んでいる東京から電車を乗り継いで目的の地に向かっている。彼女の向かっている場所は富士の樹海と呼ばれる場所だ。

（はあ、早く着かないかな。）

電車の窓の外はまだ薄暗く、朝を迎えてそれほど時間が経っていないかった。

美穂は大人しい性格で周りとなじむことが苦手だった。その為小学校から始まり24歳になり社会人となった今でもいじめの対象として見られていた。美穂はそんな生活に嫌気が差し自殺をしようと名所である樹海を選びそこへ向かっている。

鞆の中には自殺に使うロープと遺書の書いてある手紙が入っている。

そんな鞆の中身をもう一度確認すると鞆を閉め再び眠りに着いた。

程なくして目的の地に着いた美穂は樹海の中を歩きずらそうに一歩一歩と奥へと入っていった。その途中では花瓶に花が入っているものや未開封のビールの缶など供養のためのお供え物があった。

（私のためにここまで足を運んでくれる人なんているのかしら。）

そんなことを考えたがすぐに、誰も来るはずが無いと思いまた少し暗い気持ちになった。

美穂が丁度よさそうな木の枝を見つけロープを準備していると後ろから声をかけられた。

「こんにちは。」

ぎょつとして後ろを振り返ると夢の中でみた少女が立っていた。下は樹の根などとてもまっすぐに立って居られないはずなのに目の前の少女は不思議とまっすぐに立っていた。

「さきほどはいきなり夢にお邪魔してごめんなさい。いきなりですけど、あなたの生を私が貰うわ。だからそんなロープ片付けてくれないかしら？」

少女は一礼してロープを指差すとそう言った。

「私、あなたに殺されなくても自分で死ぬからいいわ。その為に用意したのだし。」

美穂は自分でも不思議なくらい冷静に言った。

「そのロープ片付けてくれたら、苦しみも無くあなたという人間を殺せるのだけど？」

「本当にあなたは苦しみも無く殺せるの？」

「正確にはあなたはすこし迷ってすこし痛いかもしれないけど、耐えられない程ではないですよ。」

美穂はその言葉を聴いてロープを片付けた。なぜならどの自殺の方法にも必ず苦しみや痛みは伴うからだ。しかしそれも『すこし』で済むならと思った。

だが、美穂には一つだけ疑問が湧いた。

「そういえばあなたって……？」

「ああ、私は死神です。あなたの生をいただきにきた。」

死神と聞いて美穂は嬉しく思った。真偽はどうであれ、その格好を見る限りでは十分それに見えるからである。そして本題に入った。

「じゃあ、私を殺してくれる？」

「いいですけど、条件があります。」

「条件？」と美穂は思ったが話を遮らずに聞いた。

「今日中にとても多くの人を殺してください。そうすれば殺してあげましょう。」

美穂はその条件をどうするか考えた。しかしすぐに「どうせなら虐められた恨みを晴らしてからでも」と思い条件に従うことにした。

「分った。その条件でいいですよ。」

「では、なるべく多く頼みますね。」

そうにつこり笑うと少女は忽然と姿を消した。それと同時に樹海の中に居たはずの美穂は入り口まで戻されていた。

美穂は家の近くの金物屋で包丁や果物ナイフなど刃物を購入すると、その足で自分の勤め先の店へと向かった。

美穂の勤めている化粧品の販売店はそこその規模がありキープ時には20人程度のお客が入るほどだった。

そのキープ時を狙い美穂は店に入る。そうするといつも虐めてくる先輩と同僚が裏へ連れて行き「あんたがこないから……」「どういづつも……」等文句を言い出した。

美穂はそれを聞いていたかと思うと背中隠していた包丁で同僚の顔をいきなり斬り付けた。斬り付けられた同僚はいきなりの事に何が起ったか分らず目を見開いていたが、そんなのお構いなしに美穂は同僚の腹を数回突き刺した。その光景を見ていた先輩は叫びながら逃げ出そうとするが美穂は包丁を持っていないほうの手で髪を引っ張り引き付けると首の動脈を切り裂いた。首からは鮮やかな鮮血が飛散りそれは壁や美穂を紅く染めていく。

二人の死を確認しても美穂は尚蹴りつけ「ざまあみろ」と言いながら何度も何度も斬り付け突き刺し自身を血で紅く染めた。

そうしているうちに悲鳴を聞き別のスタッフが駆けつけた。その血だまりに真っ赤に染まった美穂を見たスタッフは驚愕しその場から動けなくなった。

美穂はそれを確認すると彼女のもとへ歩き出した。美穂は「たすけて」と震える声で何度も助けを求める彼女を睥睨すると「嫌」と一言言い持っていた包丁をあたまに突き刺した。ガツツという音がしたが不思議と硬いという印象は無くそのまま刺さった。

三人の死体が転がる光景もどうでもいいかのように一瞥するとそこから売り場へ足を向けた。

売り場では数名のスタッフと12人あまりの客が居たが美穂の姿を見て皆恐怖の悲鳴を上げた。

それは『ただの煩い雑音』にしか聞こえなかった。そして逃げ惑

う人を捕まえては首を切り腹を刺し、機械のように殺していった。
何分経っただろうか、その場に居て逃げ遅れた6名の死体を一瞥した美穂は叫んだ。

「お前らが全部悪いのよ！ 死ぬのは当然！」

そういつと高らかに笑い始めた。もうすでに自分が自殺をする、殺されるということを忘れていた。

そこにはもう『物静かで虐められ続けた美穂』は居なくその人格も崩壊していた。

そして美穂は通報を受けた警察によって取り押さえられ逮捕された。

「ね、言ったでしょう。あなたという人間を殺してあげるって。でも、私が殺したんじゃないかって自分が殺した形だから少しだけ嘘を言っちゃったかもしれないけど……。」

聞こえては居ないだろう美穂にそう話しかけると、少女は次の送り人の下へと歩き出した。

入江美穂の場合（後書き）

ご意見感想ありましたらよろしくおねがいます。

蒼井楓の場合

目の前に小学1年生くらいの身長で顔は美少女、穏やかな笑顔を向ける少女が立っている。しかし、そんな風貌とは裏腹に全長にして3mはあるつかという大鎌を持ち白いローブを着ている。なぜ、そんな格好をしているのだろうと思っていると少女が笑顔で一言。

「あなたの生を頂きます。あと1日。そうしたら迎えに来ますよ。」
そう言って忽然と姿を消した。

バシャン！ と顔に当たる海水で防波堤に座る少女は目を醒ました。

「冷たっ！ 服濡れちゃった……」

少女の名前は蒼井楓^{あおい かえで}。ある離島に住む中学2年生。家族想い、友達想いで周りからの信頼は厚い。家族は5人家族で、父親、母親、中学3年生の姉と小学5年生の弟。

（何時の間にか寝ちゃったのか……。でも、変な夢みたなあ。）

楓は夜中に家の近くの砂浜や防波堤で海を眺めるのを日課としていた。いつもはその場で寝てしまうことなど無くある程度満足すると家に帰っていたのだがたまたま眠ってしまったらしい。

（疲れてるのかな。家に帰って布団で寝なおそう。）

そう思うと楓はスカートについた砂を掃うとそのまま家に帰り、愛用のパジャマに着替えて寝なおした。

楓はいつも家族の誰よりも朝早く起きて朝食を作るのが日課だった。この日も変わらず朝一番に起きキッチンに立っていた。鼻歌を歌いながら上機嫌に朝食を作っている姿は実に愛らしい。

朝食を作り終えるころには家族がゾロゾロと目を覚ましリビングのテーブルについた。父親はいつものものに並べられるまで新聞を読み、母親はテレビを付けニュースを見ている。姉と弟は二人そろってまだ起き切れてないのか首を頻りにカクカク言わせている。

そんな何時のものの光景を見ながら楓は、いつまでも続けばいいと心の中で微笑んだ。

目の前に楓の作った朝食の焼き鮭と白いご飯に味噌汁が出てくるとそれぞれ別のことをしていた家族は手を合わせて一緒に、いただきますと言うと食べ始めた。

朝食が終わりそれぞれ出勤や登校の準備を始める。

楓はいつも準備は先に済ませており朝食の片付けが終わればすぐに家を出れる形にしてある。その為いつも楓が姉妹の中で外に出るのが一番早く玄関先で待っていることが多い。

「いつてきまーす！」

そういつといつもの様に扉を勢いよく開けた。その瞬間周りはまるでそこだけ時間が止まってしまったかのように静かになり色が無くなった。

楓が驚いていて周りを見回すと目の前には見知った少女が立っていた。

「蒼井楓さん、おはようございます。昨晚あなたの夢に勝手に出させていただきました。いきなりで困惑されるかもしれませんがあたは今日限りで死にます。私はそれを届けるための死神とも思ってください。」

いきなりそんなことを言われて困惑している楓を見て死神と名乗った少女はにこにこ顔で付け足した。

「でも、死なない方法が1個あります。それは私のお願いを聞いてくれることなのですが、聞きますか？」

楓は混乱する頭を一生懸命に動かし整理し、答えを出した。

「死なないで済むなら教えて……」

震える声で答えたそれを聞いた少女は満足そうに頷く。

「分かりました。それは貴女の大切な人を全員殺せばいいですよ。簡単でしょう？」

そついうと少女は、また来ますと言って忽然と姿を消した。

（大切な人を全員つて……）

考えていると後ろからバシン！と勢いよく叩かれ我に返った。後ろでは姉と弟がどうしたんだと言った顔をしていたので、努めて明るい笑顔で、なんでもないと答えた。

楓の家から学校までは徒歩20分ほどの距離にあるのでいつも姉妹や途中で会う友達達と談笑をしながらいつも学校へ行く。

楓の住んでいる島では中学生以下の子供が23名しか居ないため小学生と中学生は同じ教室で勉強をしている。とりわけ小学生のが多いため中学生は勉強をしにくくよりも勉強を教えている方が多いのだが。

楓達が教室に入ると小さな子達があそぼーと言いながら足に纏わり着く。楓や姉は子供が嫌いなわけではないので先生が来るまでの間遊んであげていた。

暫くして、朝の朝会の時間になったのか教師が教室に入り挨拶とその日の連絡事項を簡潔に話した。その話が終わるとすぐに授業に入り各々机に教科書とノート筆記用具を出して勉強を開始した。

楓も数学の教科書とノート筆記用具を出して勉強を始めた。勉強を始め少しして朝の事を思い出す。

（大切な人全員……）

教室を見回し生徒と教師の顔を見て考えた。その日は一日そのことが頭から離れず結局勉強に身が入らないまま帰宅することとなった。

教室を出てしばらく歩くと朝のように周りから色が消え姉妹や他の生徒達も消えてしまった。

楓は返答を聞きに来たのだと直感するとその姿を探した。探していた少女は目の前に会われた。

「答えは決まりましたか？ どうします？」

その言葉を聞いて楓ははつきり答えた。

「今日一日、ずっと考えました。私にはやっぱり大切な人は殺せません。その大切な人を殺すくらいなら自分が死んだ方がいいです。」

そう答えた瞬間少女は手に持っていた鎌を振り上げた。

（やっぱり、殺されるんだ……）

そう思っ て目を瞑った。

どれくらい経っただろうか、その瞬間がまだ来ないのを不思議に思い楓は目を開けた。

そこには鎌を振り上げている少女の姿は無く変わりに色が戻り前を歩く低学年の子供達と少し先に行ってしまった姉妹達がいた。呆然と立ち尽くす少女だったが弟に促されて小走りにその後を着いて行った。

「ごぜんさま、初めて拒否されてしまいましたあ……」

そこにはいつもと雰囲気さがらりと変わり歳相応子供らしい声で泣きそうになっている白いローブを着た少女が、目の前に居る漆黒のローブに身を包んだ長身の20代前後の男に縋り付いていた。

「あらあら、それは残念でしたね。次からまたがんばればいいのですよ。」

男は優しい笑みで少女を見下ろすと頭を撫でた。しかし、少女はその優しさが引き金になったのか泣き出してしばらく男の中で泣いていた。

蒼井楓の場合（後書き）

ご意見感想等ございましたらお待ちしております。
読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4780f/>

死神の気まぐれ

2010年10月9日21時52分発行